早稲田大学 創造理工学部·研究科 広報誌

2013

07

Creative People

創造人

http://www.cse.sci.waseda.ac.jp/

Interview

中谷礼仁

文献発行プレートテクチ年村の古民家

トテクトニクス

〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 Tel 03-5286-3000 Fax 03-5286-3500 Creative People

普通で無名の中に普遍性が見える。それが絶妙なバランスの取れた状態。

発端は一人の先達が残した一冊の本だった。

早稲田大学理工学部で長く教鞭を取った今和次郎が1922年に著した『日本の民家』がその本だ。

今和次郎は、「考現学」の創始者として、また民家研究の第一人者として現代にも大きな影響を残した。

中谷先生は『日本の民家』におさめられた古い民家はどうなっているのか調べようと思い立つ。

残されていた民家はごくごく普通で無名な建造物だが、

長く生き残ってきた民家に共通する普遍性を見出すことに成功した。

今、中谷先生の目は、「民家」からスタートし「千年村」、「プレートテクトニクス*」へと導かれていく。

日本からユーラシア大陸までに共通する何かを求めて。

今和次郎が無名の民家に 見出した時代性

『日本の民家』には1922年(大正11年)の初版時点で41軒、その後の論文を合わせると50軒ぐらいの民家が紹介されています。有名なものよりも無名で普通、ここに大正時代の趣味性が潜んでいます。それらの民家は、その後一度も研究されませんでした。全く無名な家、保存も何もされない家が90年後に一体どうなっているのか。そういう無名な家の歴史を東ねれば、大正から現在にかけての「日本の何か」が見えくるのではないか、と考えたのです。様々な領域の有志を募って瀝青会という団体を立ち上げて調査を行いました。

最初は残っている民家のほうが少ないと思っていました。確かに都市化が進んだところは、ほぼ全滅していましたが家族が

名残り惜しんでたくさんの記録写真を残していたり、再開発や 都市化とは無縁だったところが残っていたのです。

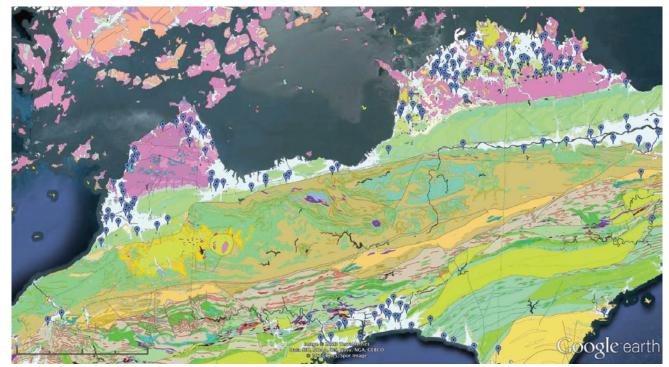
また、人は住んではいないけれど残している、というケースもありました。管理人は他にいて、年に一回だけ掃除に来る。そういう残し方がある。先祖を祀っている感覚かな。価値があるからではなく、運命的に残っているという気がします。

この結果は瀝青会著『今和次郎「日本の民家」再訪』という本として平凡社から出すことができました。また幸いに2013年度の日本生活学会の今和次郎賞と日本建築学会の著作賞をいただきました。

一軒一軒の民家から見えてくる歴史には、時代と共に変わる 部分もあれば変わらない部分もありました。日常生活の普遍的 な部分が垣間見えたように思います。



Creative People



千年村をGoogle earth上でプロットすると、ほとんどが山際と沖積層の境にあることがわかる。 地質出典はシームレス地形図 (https://gbank.gsj.jp/seamless/)

これから千年生きていくにはどうするのが良いかを考えたい

古くからある集落が教えてくれる普遍性

「民家」から「村」へ研究の対象が広がっていったのですが、 3月11日の震災にも影響されました。壊れた村には援助が必要なので注目されます。一方で、防災学の長谷見雄二先生が言っていたのですが、壊れなかった村も重要なのです。はっとしました。壊れなかったということは、地質や地形などの住環境が、ものすごくバランスが取れているということなんだと。それらの村を調査することによって、今後日本の村というものが、どういう条件であれば持続可能なのかを知ることができます。

そこで、「千年村(せんねんむら、持続的環境・建造物群継承地区)」研究に着手することにしました。古い村を探すのには、で客観的かつ信憑性のある資料をもとにしなければなりません。そんなとき、学生が『和名類聚抄』という辞典を見つけてくれました。

和名類聚抄は平安後期の10世紀中盤に成立したもので、全国で4000ほどの、当時の朝廷が把握した郷名が記載されています。その郷名と同定可能とされる村の位置をプロットした地図に地形図・地質図を重ね合わせると、驚くべきことが分かりました。それらのほとんどは山と平地の境に建っていた。住む場



所は山際で地盤がしっかりしている。そこから下ると生産ができる平地になる。それらの集落が備え持つ、環境構造、集落構造、共同体のありようを現在、調査・研究しています。千年村は実在しています。では、これから千年生きていくにはどうするのが良いかを考えたいと思います。

スケールは「世界」へ 一プレートの辺縁を眺めると 何が見えてくるのか—

以前「アジアと日本はプレートテクトニクスを通じて繋がっている」と言う話を聞きました。なるほどと思っていましたが、ある日、ユーラシアプレートで考えると日本からジブラルタルまで繋がっていると気がついたわけです。

Creative People

日本はユーラシアプレートの東の端にあり、様々なプレートのせめぎ合いの中で生まれた国ですから、その分地震も多い。しかし、プレートのぶつかり合いが山や川という地形を生み出し、豊かな国土をもたらしたことも確かです。そこでプレートテクトニクスに則り、プレートの際に沿ってどんな文明が発生して、どの様に発展し人々がどういう生活をしているのかを、世界へ出て確かめることにしました。土地と人間のかかわりというのを真正面から見据えて、土地が人間にどんな恩恵を与えてきてくれたか、あるいはどんな制約をもたらしたかを突き詰めたいのです。

例えば、人間の暮らしに欠かせないものとして水 があります。そして生活を維持するには堅固な地盤、 家を建てる土地、耕地が必要です。さらに、日の当

たる土地であるかどうかも重要です。これらの中で何が一番大事かは、場所によって異なります。ヒマラヤのような山では谷間に行けば、渓流沿いに水が手に入りますが、人は住みません。日の当たる峰の上か中腹にいて、下まで降りて水を運んでくるわけです。少しぐらい寒くたって水のそばが良いと思うかもしれません。でも、太陽のほうが大事。本当に寒くて住めません。

このように行ってみないと分からないことが多いので、ユーラシアプレートの際を歩いて現地調査を行っています。日本の 民家、そして千年村にあった普遍性と同様のものがユーラシア プレート上の生活から見つかるのではないかと考えています。

学生には現場の空気を 感じてもらう

研究室では現在は4つのゼミを設けています。先ほどの「千年村活動」と「建築アーカイブ」、「翻訳ゼミ」そして「煉瓦造倉庫の修復」です。煉瓦造倉庫の修復は埼玉県本庄市から委託を受け、煉瓦造倉庫を再生し活用するために他研究室と合同で行っているものです。

月に1回、中谷大ゼミという名前で報告会をやります。一ヶ 月の経過報告だったり、来月○○を調査するので興味のある人 は参加してください、と募集をしたりしています。

「建築史研究室」として一緒に活動している中川武先生の研究室とも様々な交流企画を行っています。「建築史研究」というと歴史的な文献を読んで論文を書く、というようなスタイルをイメージしがちですが、それだけではなく、煉瓦造修復のように実際に設計も行いますし、一般の方に読んでいただけるような本として出版することもあります。最終的に成果を社会に還元できる、というのが、わが研究室の使命だと自負しています。





編集出版組織「アセテート」小出版組織が産み出す貴重本〜

僕と協力者との自主的な活動として、編集出版組織「アセテート」を2003年に立ち上げました。世の中に未だ知られていない優れた成果を編集し、限定的に公刊する組織です。完全な独立組織によって運営されています。小出版組織ならではの可能性を考え、活動しています。

今回、翻訳ゼミの成果として、建築家アドルフ・ロースの著作を出版しました。彼の初期論文集を日本語版として初めて訳出しました。このあともロース全著作集日本語版を刊行していく予定です。